

◎早朝登山

私はいつも早起きで、4時か5時には目覚めることが多い。旅行に行ったときも早起きで、朝食までの時間は遅屈だ。何か生産的な特技でもあればよいのだが、宿の周りをうろつくのが常である。今回も同じで、宿舎の周りは山だから、朝飯前の山登りになった。

4時30分に山荘を出るとまだ薄暗く、ものははっきり見えない。誰もいないと思ったが、Sさんが朝の空気を吸っていた。ちょっと行ってきますと挨拶。とぼしい朝の光をたよりに山に向かった。やがて浅い谷を渡り、白い花をつけた灌木の斜面に取り付く。前日に山荘から観察して、このあたりから登ればよかろうと見当をつけた場所である。歩いて、日本の山と違うと感じたのは、地面の固さである。日本の山は、枯れ葉などの堆積物が厚く積もっているのが柔らかい。道を外して歩くと、地面に足跡が付く。しかし、ここでは草地のせいか堆積物は少なく、足跡はほとんど付かない。歩行中の靴底の感触は、硬さを感じた。

登山道は無いが、道無き山とはいえ、羊のけもの道がたくさん交叉していた。まだ芽吹いていない、トゲのある灌木がまばらにあり、その茂みにチリ紙のような物があちこちに引っかかっていた。よく見れば羊の^{にこ}毛である。羊どもが移動中に残した物だ。小さな流れを越えると梨のような白い花が朝日をあびてまぶしい。と、こんな調子で書いていたらなかなか山頂には着かないので、途中は省略。

山の傾斜は緩く、直登できるのでぐいぐい登った。まだ寝静まり返った山荘は足もとに小さくなり、空が広くなると、遠い山並みも地平線の内側に現れた。山荘から尾根の上方に見えた残雪が、今では近くにあった。汚れた雪を足で突つくと、意外やかなり硬いので、降雪後かなり時間がたって氷化した雪だった。

すでに勾配はなくなり、山頂の気配なのだが、ここが山頂と納得できる場所がない。「歩き方止め」のきっかけがな



山荘の前面に広がる放牧地の丘。樹木はほとんどシラカバのみである。左下の谷は高度が低いので草の伸びが早い。

いのでさらに進むと、広場のように平らな草原になってしまった。草原の端は鯨の背のような傾斜はあるが、サッカー場が三つ四つは取れそうな広さである。山荘からの標高差は約400m、推定高度1800m。まわりは一面の枯れ野原だ。

山頂の^{けじめ}を求めてなおも進むと、枯れ野の果てに竹箒の先端のような、ぼさぼさしたものが見えてきた。これこそ山頂の^{けじめ}に違いない、これで帰れるぞ。やがて「ぼさぼさ」の全体が現れると、岩くずを積み上げた祭壇のようなものが、鎮座していた。オボである。5時40分到着、山荘からちょうど1時間かかった。

実は山頂にオボがあるのは知っていた。それは以前この山に登頂した、「わりい植樹隊員」から聞いていたからである。「オボ」とは、小高い山や峠に石を積み重ねたもの。そこに土地の守り神が宿るとされる(ALE-Netより)。

ここのオボは、石積み小山の上に角材で檣を建て、鳥の巣のような小枝をの束をさし込んでいる。オボの周りには、カラの酒瓶が多数ころがっていて、地元民がここで酒盛りをするのだなとその時は思った。が、後でブルグッドさんから聞いたところでは、酒はすべて神に捧げて、地面に飲ませるとのこと。ああ、なんとも^{オボ}つたいないことを…と思ったが、俗人のあかしか。このオボは「王爺敖包(王様のオボ)」という名前だと、ブルグッドさんに教えてもらった。

日本では、山頂は文字通り最高点なので、その場で360度の展望は珍しくない。だがモンゴルの山頂は原っぱの一点なので、遠景はともかく、麓は見えなかった。麓をのぞき込むためにはかなり移動して、草原のへりまで下り、やっと眼下に緑の草原を見下ろすことができた。盆地状の草原が微妙な階調の緑色に染まっている。遠くには緩やかに起伏する丘陵が地平線にとけ込んで、なかなかの絶景である。では反対側の風景は？山の反対側を見るためには、またまたかなりの距離を移動する必要がある。緩やかな登り坂、オボのそばを通過、眼下が見える場所まで下り、やっと反



早朝登山で行ったときの「王爺敖包(王様のオボ)」。このあたりで、一番高い山である。6月でもまだ芽吹いていない。



牧草地の丘の瓦礫地帯で見た背の低い名称不明の花。



皆さんと登ったときの記念撮影。私だけ3回目の「王爺敖包」。



2回目に登ったときの「王爺敖包」。これは隣の山から見たもので、写真中央上のわずかな突起がオボ。

対側の景色と対面。モンゴルでは山頂からの展望を得るにも、なかなか厄介なことである。

オボに背を向けて帰途についた。帰りは、下りなので足取り軽く、7時に山荘に着いてしまった。テラスでは起床した数人が、小鳥の毛繕いといった感じでコーヒーを飲んだり、歯を磨いたりしてたむろしていた。

2日後に前述の山には、別の登山口から回遊コースで登った(やはり早朝単独)。その同じ日に、朝食後皆さんと私としてはこの日2度目、今度は往復コースで登ったので、滞在中この山に3回も登った。Bさんに山の名を「図都府扎那山」1886mだと教えてもらった。

●山荘生活

山荘生活の基本は、午前中のハイキングで始まる。本命の目的地は、山荘2日目に私が早朝登山で登った「図都府扎那山」である。しかし私が下山してから、空模様が怪しくなったので朝食後、足慣らしでそばの小山に行った。

そこは標高差200m程度のいくつかの丘の連なりで、緩やかな起伏が波うつ地形である。麓にシラカバのまばらな

林があるが、大部分は貧相な草草が全体を覆っている。羊の放牧地なので草が十分伸びるまえに、食べられてしまい草原は貧相なのである。ここは遊牧民の生活の場なのでこれは仕方がない。

丘の頂頭部は硬そうな岩石の列が露出し、これがやや荒涼とした景色をかもし出している。2人の羊飼いが付き添った羊の一群が丘の傾斜地を移動中だった。羊は自分の気分で勝手な行動は許されない。メイメイ鳴き声の合間に、羊飼いは、かん高い雄叫びと、長いムチを巧みに操って、羊群の進行方向を矯正する。羊飼いの運動量は生半可ではなく、さっきまで麓にいたかと思うと、今は山の頂を足早に突き進む。突然の驟雨でも、平然と仕事を続ける。激しい運動量のある労働だ。

ある時、麓のシラカバの小枝に、何かがぶら下がっていた。ハテ何かしらと近づくと、布で包んだ羊飼いの弁当であった。見つけやすさと、小動物に盗られぬ用心とで木の枝に縛るのだろう。できることなら中身を見たかった。

やがて、丘の頂上に着く。岩くずの間に見知らぬ青い花が咲いていた。羊が食べないのか、見のがしてしまったのか。日本に戻ってから、内モンゴルの同じ地域の写真をネットで見た。それは7月でなんと一面の花盛りではないか。貧相に見えた草原も、羊に食われるより早く成長するのだ。

(続く)



山荘前のテラスで日向ぼっこ。